

## CASE 02

### 地域と歩む かわまた ハーベスト

継がないと決めていた農業

祖父はトマト農家、父は米農家の佐藤弘樹さん。30歳を迎え、当時勤めていた会社を退職し一心発起して農業の道へ進むことを決めたと語ります。「子どもの頃から農業を手伝っていたので、絶対に農業はやらない」という思いがありました。しかし、震災を経験し、祖父がトマトを栽培していた場所のある山木屋地区が計画的避難区域になり、「農業を継ぐ」そんな考えが将来の選択肢に出てきました」と当時を振り返ります。



ミニトマト農家  
佐藤 弘樹 さん



1



2



1.かわまたハーベスト実行委員会のみなさん 2.川俣シャモファームによる特別授業 3.佐藤さんも出店者としてミニトマトを販売

国内全体で担い手不足が顕著となっている農業。国内の自給率は減少しており、私たちの町でも震災以降、遊休農地が増え続けています。その中で農業を未来に残そうと川俣町の農業に携わるメンバーが一致団結しました。

## 山あいのまちの収穫祭

「農家さんのことをもっと知ってもらいたい」「地域で採れた農産物を食べる喜びを分かち合いたい」「子どもたちに農業を身近に感じてほしい」「そんな想いから設立された「かわまたハーベスト」。メンバーは町内で農業に携わるメンバーで構成されており、佐藤さんもその一人。当時、就農1年目だった佐藤さんは「何事もチャンスでチャレンジ」そう思って実行委員への参加を決めたと話します。「かわまたハーベスト」では子ども向けにトラクターなどの農業機械の試乗体験やサツマイモ掘り体験など農業をより身近に体験できるほか、生産者が直接売り場に立ち、提供されるフードやドリンクなどにも町内産の野菜や果物がふんだんに使われています。「農業の楽しさや、やりがい、地元産の農産物の美味しさなどを子どもたちに感じてもらいたい」そう佐藤さんは話します。



川俣シャモファーム社長  
齋藤 正博まさひろさん

川俣シャモ博士として特別授業を開催させていただきましたが、実際に川俣シャモの雛に触ったり食べてもらうことで、より身近に川俣シャモを感じることができたと思います。こういった機会は少なく、町内にお住まいの方からも好評でした。今後もこのような活動を通して農業をより身近に、農家を身近な職業としていけたらいいなと思います。

## 「川俣で農業」という選択肢を

「私自身、家族が農家だったことや原子力被災12市町村農業者支援事業などを勧めていただきスムーズに就農が開始できました」そう話す一方「もちろん不安は大きく、「百姓」という言葉の通り農業以外にも営業や経理など様々な分野の仕事があり、大変だと思うことも多かったです」と就農して3年目のシーズンを振り返り話す佐藤さん。続けて「でもやっぱり、やりがいが大きかったです。自分の作った野菜を美味しいと言って食べてくれる人がいることがこんなに嬉しいとは思いませんでした。自分たちの活動を通して子どもたちに「将来は川俣町で農業」そんな選択肢が増えたらいいなと思います」そう話していました。